

Special Essay

Special Essay

糖尿病性血管合併症病態・治療学講座
山岸 昌一

私は、高校生の頃、図書館に対して「勉強好きの優等生があつまる場所」、「自己の欲望を無理矢理コントロールしながら機械的に勉強しなければならない場所」といったイメージをもっていた。そのように感じるのは、私のさもない性格のせいだとはうすうす感じてはいた。しかしながら、医学部に入学し医師となつてからも、なかなかこのイメージをぬぐい去れないでいたのは事実である。そんな中、学位論文の研究のため頻繁に医学図書館に足を運ぶようになってから、私の図書館に対するイメージは一変していく。なにが、私の思いを変えたのだろうか？大きなことではない。問題は、やはり私自身にあつたのだ。実を言うと、私はその時まで、図書館でそこに置かれている雑誌や資料をゆっくりと閲覧したことがなかった。図書館で調べものをして、物事をじっくりと考えるようになってから、私にとって図書館は「単なる学習スペース」から「知の宝庫」へとグレードアップしたわけである。私は、今、古い雑誌が並んだカビ臭く狭い書庫を歩くのが好きである。行き当たりばつたり50年ほど前に発表された論文を手に取りながら、往時の研究者の生き様に思いを馳せる。学術的には時代遅れとなつてしまった発見ではあるが、その論文の奥には当時を生きた研究者たちの苦悩や努力の陰が見て取れる。そして彼らの仕事は、何よりも現代を生きる我々に勇気と希望を与えてくれる。仕事に行き詰まった時、私はいつもカビ臭い書庫へと向かう。

